

9月17日～11月3日

「芥川龍之介——内なる歡びと苦惱」展開催

危機の時代、不安の時代こそ

芥川龍之介が求められる

「芥川龍之介 内なる歡びと苦惱」展が、9月17日から11月3日まで、角館町の新潮社記念文学館、樺細工伝承館、平福記念美術館の3会場で開催されます。芥川龍之介の原稿や絵、交流のあった作家たちの書簡、妻や子への遺書や菊池寛の弔辞など貴重な資料280点が展示されます。読書の秋にふさわしい特別展に、みなさんのご来場をお待ちしています。



書齋で執筆中 大正13年7月

今年、仙北市誕生から5周年、新潮社記念文学館が開館10周年を迎えます。さらに国民読書年にふさわしい企画ということで、詩人・日本近代文学館名誉館長中村稔氏編集の特別展が秋田県で初めて開催されます。

佐藤義亮と新潮社

「新潮社」を創設した佐藤義亮は、明治11年に角館町に生まれ、少年期より本を好み、文筆に関心を持つ少年に成長します。

文学熱が高まり、志を抱いて明治28年、17歳で上京を果たします。

義亮は、東京で一人、孤独や生活の困難を克服しながら、印刷工から校正係に抜擢され、次第に文壇と出版事業に興味を持ち始めます。明治29年投書雑誌「新聲」を創刊、新聲社を創立した後、明治37年文芸雑誌「新潮」を創刊、今日の新潮社を創設しました。

大正9年に郷里角館町に図書館が設置されたのをきっかけに「郷里の人々にたくさんの本を読んでもらいたい」と自らの蔵書と社の出版物を寄贈したのが大正11年のことでした。昭和26年、義亮はこの世を去りましたが、「出版物の寄贈」という意志は、社主が代わろうとも今なお引き継がれています。

新潮社記念文学館は、新潮社を創設した義亮の顕彰を目的に平成12年4月にオープンしています。館内には「新潮社文庫」があり、書籍の外CD等のマルチメディアも含まれており、その数は一万九千点ほどになり、蔵書の約20%を占めています。

芥川と新潮社・百穂

芥川龍之介は、2年後の2012年に生誕120年、没後85年を迎えます。

佐藤義亮が、明治37年に創刊した文芸雑誌「新潮」に芥川が掲載した作品は、大正8年から長短合わせて80編あまり。「新潮」は、単に作品発表の機会を提供しただけでなく、確実に作家芥川を育てた場所の一つでもあったようです。

芥川には、死の2年前にあたる大正14年、新潮社の応接室で撮られた写真が残されていますが、芥川と新潮社が晩年に至るまで深い絆で結ばれていたことが推測されます。

平福百穂と芥川はアララギ活動において知る仲となり、香取秀真宛書簡（大正11年）、岸浪静山宛書簡（大正14年）に百穂の名が見られ、歌人、画人としての尊敬を惜しんでいないことがうかがわれます。

「引用文献…『芥川龍之介大事典』」

「芥川龍之介展」の開催にあたって

作家・新潮社記念文学館名誉館長 高井有一

若い時分から文藝の世界に親しんだ人々の多くは、芥川龍之介の名を格別に印象深く記憶に留めているのではあるまいか。大正四年二十三歳のときに「羅生門」で登場して以来最晩年の「或阿呆の一生」まで、深い教養に裏付けられた才華は、若い人たちの魅き付けて止まなかった。彼の第二作「鼻」について夏目漱石が、「材料が非常に新しいのが眼につきます文章が要領を得て能く整つておます敬服しました。あゝいふものを是から二三十並べて御覧なさい文壇で類のない作家になれます」と、絶讃する手紙を送った事は、広く知られているだろう。そして、死後八十年余を経た現在でも、芥川龍之介は最も多くの読者を持つ作家の一人である。

彼の健康は衰え始める。「不眠、睡眠薬、神経衰弱、胃酸過多症、胃アトニー、痔、そんな、いろんな病気を一身に背負い込むようになって行った」と親しい友人の小島政二郎が無念を込めて書いている。病氣ばかりではない。家庭内の複雑な人間関係も、神経の細やかな都会人の彼を苦しめた。「この頃また半透明なる歯車が右の目の視野に回転することあり。或いは尊台の病院の中に半生を終ること、相成るべきか」と斎藤茂吉宛ての手紙にある。尊台の病院とは青山脳病院の事である。

昭和二年七月二十四日の未明、芥川龍之介は死んだ。この日は、誰もが後の後まで忘れられない。と言いつつたほど暑さの激しい日だったといふ。枕許には何通もの遺書があった。それを認めた芥川龍之介の身体も、汗に塗れていただろう。後に遺した子供に宛てた遺書には、父を超えて生きよ。と激しい語気で誌されている。

今回の芥川龍之介展は、この天才的作家が、どういう時代をどう生きたか、資料を通して知ってもらうための試みである。芥川龍之介といふ人間の素顔を知る契機ともなればよいと思う。



芥川龍之介の生涯 新潮社記念文学館 Tel 43-3333

- ・生い立ち・・・大川のほとりに
- ・小説家としての出発・・・「新思潮」（一躍文壇の寵児に）
- ・中国旅行
- ・家族、友人との交流
- ・自死に向かってゆれ動く心・・・「歯車」「西方の人」「続西方の人」「或阿呆の一生」
- ・遺書

芥川龍之介の書画 平福記念美術館 Tel 54-1700

- ・「河童」・・・もう一つの自画像
- ・化物帖・・・芥川の怪奇趣味
- ・山水草木図・・・水墨画を中心に
- ・行燈之会・・・小穴隆一らとの交流
- ・俳句、短歌、漢詩

芥川龍之介の遺愛品 樺細工伝承館 Tel 54-3888

- ・書齋を復元するとともに、芥川の遺愛の品々を展示します。
「文机(漱石夫人より贈られる)」「ペン軸(昭和2年7月まで使用)」「硯」「硯屏」「建水」「火鉢」ほか
- ・中国服ほか

開館時間： 9：00～17：00（入館は16：30まで）
観覧料： 3館共通券 大人（高校生以上）720円
小人（小中学生）360円（単独券、団体割引あり）



「河童問答之図」



漱石夫人より贈られた文机



主催：仙北市 仙北市教育委員会
編集：詩人・日本近代文学館名誉館長 中村稔
協力：(財)日本近代文学館